

平成31年度事業計画書
平成31年4月1日から2020年3月31日まで

特定非営利活動法人スバ・ランカ協会

1 事業実施の方針

特定非営利活動法人スバ・ランカ協会は、スリランカと日本両国の相互理解を促すこと、スリランカ人の抱える問題の改善・解決を図ることを目的に、下記の事業を実施する。具体的には、本法人の定款第5条第1項の事業として、スリランカよろず相談窓口事業、スリランカにおける地域振興と環境保全を図る事業、スリランカの子どもを対象とした教育振興事業、スリランカの物産の紹介と普及事業を実施する。

2 事業の実施に関する事項

(1)	特定非営利活動に係る事業
<ア>	スリランカよろず相談窓口事業 今後の展開による。
<イ>	スリランカにおける地域振興と環境保全を図る事業
(ア)	事業計画
①	スバ・ランカ農園のカシューナッツ及びヤシ栽培の維持・管理 ヤシ180本の内、約100本について実がなると考えられる。成木になれば1本につき20～30個は実がなるといふが、我々のはまだ若い木なので1本につき10個の実がなると考えられる。ヤシは年間で6回の収穫が可能であると言われている。年間で1,000×6で6,000個が収穫できると予測できる。カシューナッツ栽培については、天候次第であるが、60キロを確保したい。
②	ワラカーポラ郡における堆肥の増産とゴム農園タミルの経済的自立支援 ワラカーポラ郡において月25トン年間300トンの堆肥生産を実現し、ゴム農園タミルの青少年とその保護者に堆肥生産の技術を教えて有機野菜の栽培を可能にする。具体的には堆肥生産センターを創設して堆肥生産と研修に使える堆肥舎（研修ホール兼用）を建設して堆肥の増産を可能とし、この堆肥舎においてゴム農園タミルを対象とした堆肥生産実地研修を年6回開催する。現在、スリランカ政府は化学肥料の代替として堆肥を使用するように奨励しているが、堆肥の絶対量が少なく、良質な堆肥を増産して安価に提供することが急務となっている。ゴム農園タミルが堆肥生産を学び、実行することは堆肥生産の新たな担い手を創出することを意味し、人材面から堆肥の増産を支えることになり、と同時にゴム農園タミルの経済的自立を助けることになる。この事業は同郡の村域を有機農業の里にする第一歩となる。
③	ワラカーポラ郡における生ごみの堆肥化と自然酪農の実現 我々の現地協働パートナーであるチャミット氏は政府が主催する堆肥生産競技会のケーゴール県大会において1位となり、全国大会に出品することになった。また、ここ数年の堆肥生産と自然酪農の実績を評価され、サバラガムワ州の有機農業・自然牛飼育協議会のメンバーに選出された。彼の活動を評価した州の農業局は彼に堆肥生産と牛飼育のためにワラカーポラ郡ヤティヤントタ村区の土地を提供することができると示唆した。これを受けてチャミット氏は事業計画書を提出する用意をしている。我々はスバ・ランカ協会スリランカ事務所のボランティア・スタッフのマーダワ氏とともにその計画書作成に協力しようと考えている。具体的には月50トン年間600トンの堆肥生産を可能とする堆肥舎と牛24頭を飼育できる牛舎の建設を目指す。堆肥の材料としては、自家生産できる牛ふんと同時に、家庭の生ごみを使おうと考えている。ワラカーポラ郡にはごみ問題があり、当郡の町域の1500軒のごみが当郡の村区に投棄され、ごみの野積処理が行われ、ごみ山ができており、土壌や水の汚染が深刻である。ごみの60～70%が生ごみである。この生ごみを分別回収し、堆肥化できればごみの減量化を実現でき、ごみ問題の解決につながる。そのためには生ごみの堆肥化に詳しい専門家である三重県津市の堆肥育土研究所の所長である橋本力男氏をスリランカに招へいしたいと考えている。彼からはスリランカに赴きチャミット氏やマーダワ氏を中心にした現地協働グループを指導してくれることに了解を得ている。スリランカのDSつまり郡という地方自治体ではどこでも同様のごみ問題を抱えており、ワラカーポラ郡における1500軒の家庭生ごみの堆肥化が実現できれば、地方自治体におけるごみ問題解決のモデルケースになると考えられる。堆肥舎、牛舎、橋本氏の招へい、生ごみの分別システムの確立などに700～800万円が必要となるであろう。国際協力をかかげる日本の環境保全基金に申請する。
(イ)	支出 2,292,233 円
①	518,883円 内訳 労賃 396,429円（チャンダヤ氏12ヶ月214,286円＋ヤシ園管理者A氏12ヶ月128,571円＋臨時雇用53,572円）、肥料 21,429円、電気代34,286円、交通費42,857円、通信費 2,360円、カシューナッツ殻取り費用 9,927円、カシューナッツ郵送費 11,595円
②	1,767,350円 内訳 建設労賃 224,000円、堆肥生産作業員給料 126,000円、ワークショップ講師謝金 33,600円、建設資材費 373,500円、建設資材運搬の車両費 11,200円、堆肥材料費（50トン）78,400円、堆肥材料運搬の車両費 49,000円、粉碎機購入費用 140,000円、ふるい機製作費 105,000円、電気工事費 45,500円、水道敷設費 52,500円、車両のガソリン代 115,500円、堆肥舎等の電気代 50,400円、旅費・交通費 100,000円、通信費 30,000円、ワークショップ費 141,750円、借地料 73,500円、雑費 17,500円
③	6,000円 内訳 通信費6,000円
(ウ)	収益 205,786円
①	205,786円（内訳）ヤシの実販売(6,000個×40ルピー)171,500円、換金作物販売 34,286円
②	0円 ※ 東洋ゴム環境保護基金からの助成金 1,481,250円
③	0円
<ウ>	スリランカの子どもを対象とした教育振興事業
(ア)	事業計画
①	ワラカーポラ郡の幼稚園における汚水処理付きトイレの建設

	『東南アジアに学校を造る会』（和歌山県新宮市延命寺と宝珠寺）からの21万円の助成金を基に、ケーゴール県ワラカーポラ郡キトゥルガラ村のスラタリー幼稚園において汚水処理付きトイレを建設し、寄贈する。この事業は幼児教育支援の一環であるが、同時に環境保全の活動であり、幼児の環境教育に資するものである。
②	タミル&シンハラ児童の合同課外授業を行うための環境教育センターの開設とホールの建設 平成27年度末（平成28年3月31日）に夢屋基金からの助成金を得てガラピタマダ地方アルピティヤ村のチャミット宅においてゴム園のインドタミル小学校の児童を対象に、インドタミル人で社会的に成功した「先輩」を講師に招いて授業を行った。これはインド・タミル児童には中学校・高等学校への進学を動機付けるための授業であった。平成29年1月には、大竹財団の助成を得てドゥヌマーラ村のシンハラ中学校とインドタミル小学校の生徒を対象にした合同環境教育授業を行った。希少魚類バンドゥラ・ペティヤーの生息する小川に行きその魚類を観察し、サナサホールを借りて合同授業をおこなった。平成30年1月にはモリコロ基金からの助成金をもとに亀山市の「魚と子供のネットワーク」の専門委員谷口倫太郎さんをスリランカに招いて、ワラカーポラ市のドラワカ中等学校において淡水魚の保護について講演をもらった。この時の参加者は当学校のシンハラの生徒のみであった。シンハラ学校へ他校の生徒、特にタミルの生徒がくることは様々な手続きが必要であり、承認までに時間がかかりかなり難しい。平成30年3月には、インドタミルとシンハラの生徒及び青年をチャミット宅に集め、合同農業研修を実施した。まず、チャミット宅において、k. wijerathnam氏の環境教育授業を受け、チャミット宅の近くにあるジャヤマガ青年農業者会の畑に行き堆肥づくりを体験した。平成31年3月には、チャミット宅において、デヒービタのインドタミル学校とガラピタマダのシンハラ学校の生徒それぞれ10名計20名と教師それぞれ2名計4名そして保護者5名がダディガマ農業指導員のインドゥマリー・ティラカラトナ氏による堆肥生産とキノコ栽培についての授業を受けた。S.A ウィジェラトナム氏にタミル語の授業をお願いした。インドゥマリー・ティラカラトナ氏は無償で授業を行った。ノレガリンの生徒は人数は限られているが、アルピティヤ村周辺のインドタミルの小学生が進学する中学・高等学校である。4年間のこうした経験を通して、両民族の児童・青年が自由に集まり、活動をとることができる建物が必要であると痛感した。サナサは私的な組合の運営であり、使用料も高く予約も難しい。学校を借りるには地域の教育委員会の許可が必要であり、時間がかかるし、インドタミルの学校を使えば、シンハラの生徒や先生は行きにくいと感ずる。逆も同様である。両民族にとって行きやすい中立的な場所が望ましい。こうした場所があれば、協会が昨年度寄贈し、今はシンハラ小学校においてあるコピー機をそこに移すことができる。こうすれば、シンハラとインドタミルの先生が気軽に使うことができる。この行きやすい中立的な場所としてはチャミット宅が最適であると判断し、そこにシンハラ・タミル環境教育センター（仮称）を開設し、専用ホールを建設したいと考え、昨年度、いくつかの環境基金に申請したが不採択であった。その理由は基金が一般的には建物、箱物の建設に助成するのを好まないからであろう。我々はいろいろな方法を検討し、自前で資金を調達しなければならないということになる。方法としては、例えば、幅広く出資者を募り、その返礼としてスリランカの特産物を差し上げるという方法、つまり、クラウドファンディングと呼ばれる資金調達の方法がある。その他にも、有機栽培紅茶、有機栽培コーヒー、ワラカーポラ郡特産の黒胡椒、白胡椒、シナモンのフェアートレードによる資金調達も考えられる。また総会では、日本文化交流会館にしてはどうかという意見もあった。今一度、会館の目的についても検討を加え、資金調達を幅広く行えるように計画する必要がある。
③	希少魚類保護活動の推進 亀山市の「魚と子供のネットワーク」の環境教育の専門家である谷口倫太郎氏がワラカーポラ郡の希少魚類が生息する小川の魚類生態系を調査し、第68回魚類自然史研究会（3月9日～10日：手柄山交流ステーション；姫路市立水族館）で報告された。この報告を踏まえて谷口氏から助言を得て、希少魚類保護に関する環境教育プログラムを作成する。
④	日本語辞書&日本語教育教材の贈呈 中高等学校、大学、日本語私塾（日本語センター）において日本語を学ぶ生徒・学生に和英・英和辞典、電子辞書を、若いスリランカ人日本語教師たちに日本語教育教材と日本語能力試験問題集などを贈呈する。そのためにHPを使って、今まで以上に積極的に、中古品の寄贈を呼びかける。
⑤	ワラカーポラ郡の学校あるいは学校のバレーボールクラブへのバレーボール用品の贈呈 協会のスポーツ教育部長である茂木一美がバレーボール社会人チームの監督をしていた時に親交のあった実業団チームや高校チームからバレーボール用品を寄贈してもらい、必要とする学校やクラブに贈呈する。
(イ)	支出 1,628,205 円 ① 210,249円（内訳） 労賃 89,280円 建設資材 103,680円 輸送費10,080円 雑費7,200円 ② 51,928円（内訳） 紅茶（マックウッドBOP20箱、アールグレイ20箱、ティンブラ・ティーバッグ30箱）27,357円、サマハン（20箱）3,571円、有機紅茶（20箱）16,000円、胡椒類5,000円 ③ 12,400円（内訳） 通信費2,400円、交通費4,000円、諸経費6,000円 ④ 27,400円（内訳） 郵送費（トライコ）25,000円、通信費2,400円 ⑤ 0円
(ウ)	収益 0円 ① 0円 ※『東南アジアに学校を造る会』からの助成金21万円 ② 500,000円（クラウドファンディングによる寄付金） ③④ 0円
<エ>	日本とスリランカ両国の相互交流推進事業およびボランティア支援事業
(ア)	事業計画 ボランティア親善旅行2019 「シンハラ語を学んでスリランカに行こう」というボランティア親善旅行を企画し、ワラカーポラ郡

	アルピティヤ村周辺のゴム園インドタミルとシンハラの小学校、スパ・ランカ日本語研修センターの生徒、及びガンパハの真珠日本語センターの生徒と交流し、文房具を寄贈し、日本舞踊、民謡、書道、盆踊りなどの日本文化を紹介する。加えて世界遺産を見学する。10月初旬の予定。
(イ)	支出 8,400円
	8,400円 (内訳) 通信費2,400円 交通費3,000円、諸経費3,000円
(ウ)	収益 0円
<オ>	スリランカの物産の紹介と普及事業
(ア)	事業計画
	マックウッド社のリーフ紅茶、スリランカ紅茶局のティーバッグ、サマハンの随時販売に加えて、ワラカーポラ産の胡椒、シナモン、カカオ、ゴムのフェアトレードの実現を目指す。年間の集荷量は胡椒が7,000キロ、シナモンが5,000キロ、カカオが2,000キロになるという。売値は黒胡椒1K900ルピー、白胡椒1K1,500ルピー、シナモン1K2,600ルピーとのこと。カカオの価格はいまだ不明。
(イ)	支出 31,720円
	31,720円 (内訳) 紅茶 (マックウッドBOP10箱、アールグレー10箱、ディンブラ・ティーバッグ15箱) 13,678円、サマハン (10箱) 1,785円、有機紅茶 (10箱) 8,000円、胡椒類3,000円 輸送費 2,857円、通信費 2,400円
(ウ)	収益 39,750円
	39,750円 (内訳) 紅茶 28,750円、サマハン5,000円、胡椒6,000円
<カ>	スリランカを紹介する広報啓発事業
(ア)	事業計画
	① シンハラ語初級・中級講座を開講する。名古屋西生涯学習センター (新海啓一氏)。 ② スリランカ・カレー教室を開催する。
(イ)	費用 85,700円
	① 56,000円 (内訳) 施設使用料 24,000円、教材印刷代金 30,000円、諸経費 2,000円 ② 29,700円 (内訳) 施設使用料 2,400円、材料費17,300円、謝礼 10,000円
(ウ)	収益 101,000円
	① 56,000円 (内訳) 受講料 56,000円 ② 45,000円 (内訳) 教室参加費 45,000円

